

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

5. 身 体 (翻 訳) その1

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art* 5. *Bodies* Part 1

後 藤 廣 文
Hirofumi GOTOH

前章での捕らえどころのない絶対的なものを追い求めるダンとは離れ、この章では物質界に戻って物質界に対するダンの姿勢について考えなければならない。しかしこれは研究者達の非難の的になってきたことである。「ダンは何を見た時の喜びを具体化させたり連想させることはなく、彼の詩は全て盲目の世界の住人によって書かれたものようだ」¹⁾とルーパト・ブルックは不満をもらしている。更に、この非難はJ.E.V.クロフツによって当時の文学的慣習に反抗するダンの特質は「詩人としての素質が異常なほどに欠けていることによって」決定されたとする才気あふれた攻撃的論文で詳細に語られている。クロフツ教授はこれら欠けたものの内の主要なものとしてダンの美を具体化しようとする感覚の欠如をあげ、「ダンにとって視覚界の美は何の意味も持たないし、本気で取り組むような目的にふさわしいイメージを与えなかった」²⁾と言う。

これらの攻撃を迎え撃つ最もよい方法は、ダンの詩の中からこれは視覚界の美を表していると明言できるような句を探し出すことではない。また、ブルックやクロフツの優れた批評眼をほめ、ダンをおとしめることでもない。もし、ダンが視覚美に無関心であったり、慣れてしまっているように見えたとしたら、それは視覚美という概念がダンの作品を研究するには不十分だということなので、それに代わるものの提示を考えなければならない。ブルックやクロフツの考えは、彼らの言説の限りでは正しい、ほぼ正しいが、充分とはいえない。ダンの作品に見られる視覚美の不足は、視覚美を強制的に排除してしまうほどの他のもっと内面的に切迫するものがあつたからなので、中身のない空っぽの詩というようには感じられない。ダンの絶えざる内的経験の研究や「色艶や素肌を愛するもの」³⁾への嘲笑が悩めるダンの姿を明確に表している。

とはいえ、まずブルック＝クロフツの見解を受け容れて、二人のダン論から始めるのがよいであろう。というのは美的感覚の不足がダンの詩に力を与えているからだ。美感の不足するところを調べれば問題になっていることがすぐにわかる。ダンに何が欠けているのか同時代のダンと対極の性質を持つトマス・トラハーンと比べてみればわかる。トラハーンはその詩で創造界にある忘我の喜びを感じ賞賛する。次は「挨拶」の一節である。

新たな輝く喜び！

それは、黄金や真珠にまさるもの！
このような聖なる宝は少年の身体。
その中にこそ靈魂が住まう。
彼らのみごとな四股、晴れやかな気持ちには
豊かさがあり、全世界が入っている。⁴⁾

ここでトラハーンが主張していることはきわめて明らかなといえるであろう。子供を見、お金の山を見れば、子供の方がずっと美しく、価値があることはすぐにでもわかる。子供がお金のために手や足や眼を犠牲にするなんて考えるだけでも心の動揺は抑えられない。トラハーンの子供はすばらしい造化の妙（「みごとな」）だという把握の仕方はベン・ジョンソンの下の息子の墓碑銘と同じものである。

おだやかな平和のうちに眠る。問われたら
ベン・ジョンソンの最高傑作ここに眠ると言え。⁵⁾

しかし、ダンにはトラハーンのような連は書けなかった。生命に満ちた複雑な子供の身体にダンは気づかなかったといえる。同様にトラハーンの感嘆するような喜び、つまり思わず創造主を讃美したくなるような気持ちはダンの感じなかったものであり、ダンは我々がトラハーンと共有するような自分が生きていることの爽快感を覚えたこともない。

また、ダンにこれが不足しているのは他の詩人が伝統的に喜びとしてきたものをさげすんで成功をおさめるような才気あるパラドキシカルな詩を書きたいという思いが原因ではない。説教や信仰に関する著述で最も危機的状况にあったことを表すところに戻ってみれば、この世の美や豊かさ、活気に対しては全く麻痺していることは既に書いた通りである。彼のキリスト教信仰は曖昧で、混乱したものである。『黙想録百題草』でトラハーンは子供の頃見た世界の輝き、永遠の驚きに出会ったことを思い出している。

小麦は輝く永遠の穀物。刈り取るべきではないし、種をまかれることもなく永遠にあるものだと思っていた。路のチリや石は金のように貴重なもの。最初は門がこの世の果てと思っていたが、その門の向こうの緑なす木を初めて見て我を忘れうっとりとなった。その心地よい、この上ない美に心が弾み、ほとんど恍惚の状態になった。緑なす木はそれほど不思議ですばらしいものであった。⁶⁾

これとは対照的にダンは説教の中で子供の頃のことを思い出す時最初に思い出すのは罪だということとは確かだと言う。事実子供は生まれる前でも暗く血生臭いことに関心のあるもので、それ以上悪いことをしないにしても、母親の子宮の中で死すべきで、地獄行きにあたいするとダンは言う。「子宮の中で、闇の行為の準備をし、その間ずっと光を奪われている。また、子宮の中で血を受け、

残酷な行為を教えられており、まだ生まれてはいないが永遠の罪に落とされる可能性がある」というダンの言葉は印象的だ。彼の説明によれば人間の肉体は「湿った土くれ」、「しっくいによって固められたチリ」である。肉体は生きている間に腐敗によって分解される。肉体は「毒の箱」であり、その中に見られる世界は「毒蛇の巣、毒矢の入った矢筒」である。その中では「全ての物のかすやライ病菌がくっついていて。」人間は「あらゆる悲惨の入れ物、大洋」、幸せになれる確率は、一時的でしかないが、三つに一つとダンは見積もる。誕生その時から我々は囚人として運命づけられ、「我々の生活は死刑執行の場へ、死へと進んで行くだけでしかない」⁷⁾のである。

こんな風に判断されてしまうと、人生は最も不快でうんざりするような入会儀式でしかなく、分別のある行動はとれないであろう。「他に救われたり、天国に行ける方法があったとしても生まれた後この世に生まれなかったら良かったのにと願うことしかない。」想像される人生の楽しみもダンによってその価値が減じられる。自然界の美しいものもほとんど尊重されることはなく、「何でもないものになるということがわかる。単に神に関する知識を得るための薄暗い、頼りない方法」でしかない。活力、知力、成長は善いものといわれるが、チリの偶然である。食べたり、飲んだりする喜びは、それがどんなに洗練され、優雅なものであっても、「貴重なフン」や「珍しい便」への高価な変化でしかない。蜂蜜のような無害と思われる食べ物ですらダンはプリニイの説を根拠に「天の発汗による排泄物……星のつば、粘液……蜂のへど」⁸⁾と見る。

もちろん性的な楽しみもこの世界観ではほとんど言葉に表せないほどに汚らしいものとなる。妻と交わることを快楽と認める夫は「妻の心の中では姦通する者」⁹⁾である。男の欲情をそそる肉体美は金ほどにも尊重にあたいするものではないことに気づくべきだとダンは言う。金のように輝く「労働」や「勉強」は概して必要だが美はいかなる努力も伴わず生じるものである。一生懸命働いて特別な食べ物を食べても美しい子供が生まれるとは保証されないのである。美はどこにあらうとも単なる「偶然のできごと」でしかない。従って、ダンは本当に価値のあるものではないと結論づける。¹⁰⁾ お金とも激しい労働とも関係がないという理由に基づいて美を低く見るこの見方は前に引用したトラハーンの一節とは対照的だということも雄弁に物語っている。

さて、ダンの宗教的な著作から私が集めた地上の物に関するこのような暗い見方に反するかのように、説教その他の中に時折キリスト教徒の喜びを奨励するような言葉が見られるという点と反対されよう。が、説教集の大きな暗さの中に彼の全体的な態度からは推測できないような喜びを人生のささいな事柄から見つけ出すのを垣間見ることができるということも確かである。例えば、「陽気な街頭の音楽」¹¹⁾ がロンドンの冬の朝に聞こえるとその良さを認めている。こんなことに気づく人が、説教であえて暗くしようとしているほどには、この世の美に対してひどく麻痺しているということはある。結局のところダンはこの世での報いの追求を、既に見たように、教会の外のみならず内でも勢力的に続けていたのである。ダンは会衆に恐怖を与えることを楽しんでいたので、説教で否定的なことを強調するのは興奮しやすい彼の欠点が見られたもので説教壇の下に居並ぶ青ざめた顔の崇拜者達を脅したり、すかしたりしたいという彼の気持ちの表れでしかないのだろうか考えて見る必要がある。

これを考えることが当を得ているかどうかかわからないが、確信できることは説教の中にダンの明

るい人生観を探し出そうとしてもキリスト教徒としてのわずかな喜びを求める断続的な声しか見つからないことである。事実ダンのたくさんの著作の中に見られる腐敗に関する不快な場面には時として明らかに冷笑的な調子が見られる。楽しんでいるようなこの調子は多少なりとも破壊そのものに関心があるからだ。ダン是世界を餌食として夢中になって世界を追いかける。彼の使う言葉はこの世の崩壊して行く物質に対して忌み嫌われる固定した組織体を作りあげる仕事に充分対応している。物体には性質を変える力があるというダンの見方を知るには前に引用した例——母親の子宮の中で丸まった残忍な胎児の記述、例えば「闇の仕事にふさわしい」、「血で養われる」——をいくつか考えるだけでよい。罪のない肉体の奥深くを悪意をこめた眼でにらむのである。

傷つき腐って行く肉体を想像する時にはペンに力が入る。肉体の禍のテーマを生き生きと追う。ダンの説教では色彩がほぼ完全に欠けているが、病の主題に乗り出す時には肉体の禍のことに戻り、「青ざめて生気がない」、「黄色い黄疸」、「土気色」、「ライ病による皮膚の黒い吹き出物」¹²⁾と表される。ダンの想像力が最も高まると死の共謀者達は人格と声を持ち「ここで銃弾は男に尋ねる。お前の腕はどこだ？ ウルフ（即ち癌）が女に尋ねる。お前の胸はどこだ？」¹³⁾と言う。破壊的要素が幻覚を起こして肘をつつく仲間として具体化されている。破壊の過程が詳しく述べられており、しかもその過程に興味を持っていることは間違いない。ダンは肉体は「海で侵食されて、ヘドロとなる」、あるいは墓で悪臭を放ち溶解するものと想像し、「あなたの肉体は最初にゼリー状の排泄物から作られ、最後には、また、これに分解される。自然界でこれほど不快で腐ったものはない。」¹⁴⁾と想像する。ここで朽ちる肉体は人間の精子同様液状であり、朽ちる肉体同様に嫌悪感をもよおすものだという両方のことを示唆しようとするダンのこの巧みな表現は想像力が活発に働いている証拠である。主題をつかんだ時の心の活発な動きが感じられる。

このような充満する恐怖を考えると J.E.V. クロフトの視覚美への要望はどちらかといえば哀れに響く。もっともクロフトは説教ではなく詩について言っているのだが、いずれにせよ彼が建設的な想像力を願うのは、説教においても、もっともなことで、健全である。実際ダンはこのような願いにそむいてはいない。さ迷えるダンの精神を伝える説教で真に注目すべきことはその身体性である。身体がけなされている場合でも、身体について語っていないと思われる時ですらも身体性が色濃く存在する。魂には「骨があり、肉体と同じである。」従って、「けいれん、病痛、ひきつけ」を起こす。魂の中で血が脈打っているので罪を犯す度に「魂を切開、激痛、刺らく、つまり魂の血の放血」をしよう。身体はダンの注意を引く主題では全然ないのだが、外科用語が身体の知覚できる感じやすい部分と結び付けられている。また、「霊の腸の中でも霊不足によって腸が擦りむけ、擦り切れ、潰瘍が生じる」¹⁵⁾と表現する。説教集を読んでいると人体に関するこの難解な事実を心に刻むことの必要性を何度も意識させられるのである。罪は行為、あるいは精神的傾向としてではなく、神経、弁膜、内臓という生物学上の塊を表す語で示されている。罪には心臓があり、「罪深い行為をする身体全てに血や生命を運ぶ」肝臓があり、「罪をしっかりと結びつけるための腱と靭帯を、骨や抵抗し悔い改めることのない罪にまで液と栄養分を与える骨髄や脊髄を生み出す」¹⁶⁾脳を持っている。知識と感情の豊かな混合を知ることによって我々は骨髄の中に入ってその真に迫った柔らかさを体験するのである。

ダンの霊的な内容に深い解剖学上の知識を持ち込むという考えは教父達から得たものである。魂の骨という考えは聖バジルに由来するし、タータリアン、クリサスタム、オーガスティン達は皆魂や魂の病を論ずるのに医学上のイメージを使っていた。¹⁷⁾ しかし、ダンはこの問題を選んで発展させるに当たっては自らの意向に従っていた。肉体の構造と機能に関心を持っていたのである。彼の作品を読むと門外漢ではあるが彼の作品が医学的な文献として広く読まれており、当時の最先端の研究に遅れないように努力していることがほのめかされている。¹⁸⁾ ウォルトンはダンの思い出を書いた詩の中で医学的に専門的な事に対してダンが知識を持っていることを取り上げ、ダンがかつては医者になることを考えていたということを暗示している。¹⁹⁾ ダンの継父シミングズが既に述べたように医者でロイヤル・コレッジ・オブ・フィジシャンズの学寮長だったので、初期の頃から医学的な話しを聞く機会があったことであろう。11歳の時にセント・バーソロミューズ病院に隣接する家に引っ越しているので内科医や外科医の毎日の仕事が更にダン少年の意識に影響を与えたに違いない。²⁰⁾ 大人になってダンが自分の不健康な状態に強い関心を抱いていた事は手紙で証明されている。1623年の危篤状態（現代の専門医なら再発性発熱と診断する）の時にはその症状の詳細とそれに対する医者への反応を記録し、後に本として出版した。丁度その頃説教を権力志向の表現手段としていたので、説教にそれを取り入れる方法として人体解剖用階段教室や診察室に興味を抱いていた。

しかし、それだけではない。ダンの身体の表面的な外見に関する語り方は風変わりであり、二つの理由で目立つ。第一は身体の動きにはほとんど全くといっていいほど触れていない。身体の潜在的敏捷さや優美なところは彼の視野にはなく、概して身体の表面的な外見に関してである。どちらかといえば、臓器のかたまりやその大きさ、関節に関心を持った。彼の想像力は身体の内部の構造に入り込み人体解剖をしたくなるのである。特徴的なのは説教の中で小旅行という言葉を使って質問を発しながら、実体のない魂が解剖体としての人体の腔や囊、「水管」や「水槽」を通ると話していることである。「食料貯蔵室、地下食料庫、地下貯蔵庫を、飲み物や血や尿を運ぶ脈管を見ると、そこには数ポットルズ（半ガロン）、数ガロンが入っている。霊の炉、脳室、胸室を見ると、そこは指ぬきのような形ではない。」²¹⁾ 説教は講義になっているが、説教壇から離れてはいない。どこか広々とした大邸宅の各階の部屋や奥まったところにある地下貯蔵室や暖炉を指し示しながら登るように身体の階段を登っているように思われる。彼独特の頑強な言葉（「ポットルズ」）で構想を思いめぐらすことによって更に構想そのものを強固にするのである。

ダンの解剖学的用語使用について二番目に注目すべき特徴は次の例にも表れている。人体が系統的に無生物のもの（「食料貯蔵室」「地下食料庫」「地下貯蔵庫」）に同化、あるいは合うようになされており、それによって生きた人体の活気がそがれず、むしろ人体の大きさや現実性を増すことになっている。この変わっているが説得力のある技法はダン独特の天賦の才のしるしであり、その技法のさまざまな使い方のいくつかを後にこの章で検討することになるであろうが、手始めに『危篤時における信心』からの一節を選んでみよう。ここでダンは古代の宇宙——「小世界」としての人間——を黙想しながら、これは複雑な人体に充分に当てはまるものではないという理由で拒否していることがわかる。

人間は地球より多くの構成要素から成り立っている……もし地球の中にあるような人間のこれら要素が伸び広げられると、人間は巨人となり地球は小人となり、地球が地図に、人間が地球となるであろう。もし人間の中の全ての血管が伸びて川となり、全ての腱が鉦脈に、全ての重なり合う筋肉が丘に、全ての骨が石切り場の石に、その他全てのものを地球のそれと対応するものに合わせれば、大気は人間の動く円（軌道）には狭すぎ、天空がやっと人間というこの星にとってふさわしいものとなるであろう。²²⁾

ダンの探求眼は人体を広げ、一層複雑で多様なものとする。彼の散文は顕微鏡のレンズを絞って焦点を合わせるようなもので、我々がよく知っている身体の小さなものが驚くような地理的広がりを見せる。終わりの方では巨大な人間が惑星の中に首を突き出している。しかし、この散文が生み出す効果は単なる拡張だけではない。骨、石、川、鉦脈、血管、腱が混ぜ合わされその結果丘や穴や窪みも備えた一層完全なものを出現させる。少年達に関して描いたトラハーンの詩の「晴れやかな気持ち」（原義「紺色の血管」）は色による外見でしかないが、ダンも身体を言語の中に取り込み空間感覚を伝えるので奥行きがある。何層にも重なった組織を意識することになるのである。たとえば、「重なり合う筋肉」とダンが言うと、何層にも重なり合った筋肉を想像し、その厚さを想うのである。しかし、逆に上述の一節の身体に関する記述は全て無生物に喩えられているので我々はより大きな衝撃を受ける。一時的ではあれ身体の無感覚となった部分を手にする時に感じるようにより一層身体から離れたという印象が与えられる。

他の詩に似たような例を見つけるのは難しくはないが、これによって非常に不思議なことにダンの詩に様々な効果を生み出す理由が説明されるのである。「恍惚」の恋人達は次のように言う。

ぼくたちの手のひらは、にじみ出る
香油でしっかりくっつき、
僕たちの視線は絡み合い、
眼をより糸で結んでいた。²³⁾

より糸で結ばれ、しっかりくっついた恋人達は石のようなかけはなれた存在感を獲得する。二人が（魂が抜け出した）肉体のみの存在であるという事実がこの詩のポイントの一つであり、魂の抜け出した肉体は具体的には（ダンの言う「墓の石像のように」）一層重いものとなるということができる。しかし、眼をより糸で結ぶというイメージは穏やかではない。四つの眼を結ぶより糸という考えが物議をかもしているのである。A.S. ブランデンバーグがこのイメージは我々が使えば「馬鹿げているし不愉快」²⁴⁾になるだろうから、このイメージの美的感覚に注目しなければならない義務はないと断言する。しかし、彼の警告はこのイメージの有効性に対する賛辞を贈ることにもなっているのである。確かにより糸で固定された眼を想像してたじろぐ。しかし、ダンも題材を生命のないものにするによって、それがいつまでも我々の心に残るように図っているのである。

汗も役に立っている。恋人達の手のひらをしっかりとくくりつけるのは汗だからである。「石像」

の中から流れ出るものによって生あるものとなないものの釣り合いが保たれている。汗は皮膚から出た後生きた有機体としての役割を終える。ほぼ同じ状態になる涙のように有機体が有機体としての役割を終えていくことにダンは関心を持っているようだ。「愛の食療法」の汗と涙——「誰かれ構わず見る眼は涙より汗をかく」——との混同に魅惑されている。「幽霊」の不実な女性のかく汗がロウソクの光に当たって金属のように輝く。

そうなると、捨てられた君は、あわれポプラのように震えて
水銀のような冷や汗に濡れて、横たわる。²⁵⁾

接合剤や手から汗を滲み出す恋人達のように水銀を滲み出す女性のその特異な肉体が強く印象づけられる。例えば、「嫉妬」では「かさかさの樹皮におおわれた肉体」²⁶⁾ とかさぶたにおおわれた死の床にいる夫が描かれている。これは必然的に耳に毒を流されたハムレットの父の描写に結びつく。

たちまち皮膚は粘液でおおわれたよう、
らい病さながらに汚く忌まわしいかさぶたにわが滑らかな身体が
おおいつくされてしまったのだ。

いずれの引用も、生きた皮膚と死んだ皮膚とを混ぜ合わせることによって、表面に表れた病気に我々は感覚的に警戒心を喚起させられるのである。

その効果は直ぐに表れる。生と死の衝突は読者に嫌悪感を抱かせるか、誘い込むかのいずれかに使うことができるからである。「幽霊」のかわいらしくない水銀のような冷や汗に濡れる女性と比べられる女性として「プロブレムⅦ」の女性をあげることができよう。この散文で吟味されている問題は「何故最も美しい女性はいつも最も不実なのかということであるが、「心は身体の気質に従うので容貌が変わっていくにつれて心も変わるのだろうか？それとももっとも純粋な金属で作られた鐘はその音が一番大きく、長く鳴り続けるように、楽しい想いは長く続き次の楽しみまで続くのだろうか」²⁷⁾ とダンは考える。ダンが想像するように女性の中の何かは愛の営みの終わった後叩かれた鐘のように震え鳴り響くのである。心とは別の繊細な合わせた身体それ自体の記憶はロレンスの『虹』でトム・ブラングウィンがリディア・レンスキーに求婚に来て帰り際に一束の水仙を置いていくがその水仙に対するリディアのそれを思い出させる。

……彼女は牧師のお茶を用意し続けた。テーブルが必要なので水仙を調理台にかたずけたが、それに眼をとめることはなかった。ただその時手に触れた冷たさだけがいつまでも余韻として残った。²⁸⁾

花に触れた感覚が余韻のように身体に残る。ダンの「プロブレムⅦ」ではオルガズムがいつまでも耳元に残る音の調べのように身体に満ちるのである。女性を純粋な金属製の鐘に喩えることによ

て、女性の肉体存在としての生の、男にはわからない、喜びをダンが暗示しているのである。つまり、金属のイメージによって女性は一層生き生きと表現されるのだ。

生きたものと生きていないものとを融合させる時に得られる詩的效果に対する注意深い関心を持つと、想像されることではあるが、生命とか感覚があるとは疑わしい、あっても制限されているもの、例えば髪や骨のような身体の一部に医学的な興味を抱くようになるのである。「第二周年記念の歌」に見られるダンの当時の科学的見解の概説の中で、指の爪のように髪が大いに議論されていることを正確に述べている。²⁹⁾ 専門家は髪を身体の一器官と分類するのか、それとも単なる無駄なもの、つまり「排泄物」なのか分類に困っていた。1610年の『一般医学』の中でフェリネリウスは断固として排泄物に分類した。ダンはこの科学的問題を解決しようとした訳ではないが、このような生きているのに自発的に活動できないものに想像力をかきたてられた。骨に感覚があるかということに関しては16・17世紀の医者議論では感覚はないが感じやすい皮膚に覆われているというのが大方の一致した見方であった。ダンが善行に関する説教の中でこの考え方を慎重に、具体的に説明している。「骨そのものには感覚はないが、苦痛を感じる。……苦痛の膜、つまり骨をおおい包む膜、薄い膜、薄い皮膚のようなものは苦痛やあらゆる痛み非常に敏感である。」³⁰⁾ 感覚と無感覚、生物と無生物を結びつける接点を見つけるのにダンが細心の注意を払うのである。

「聖遺物」や「埋葬」ではこの結びつきが洗練され、かつ複雑になされている。髪と骨が結び付けられているが、ダンがこれらが死後も何か見えない、計り知れない方法で保たれると想像しているのである。「骨にからまる金髪の腕輪」を掘り出す人のことを語る時我々は死に生が巻きつけられているというこの行の暗示にびくりとさせられる。髪は死んでいるが、不思議にも永く保たれているその色の鮮やかさは地下に絶えることのない生命力のようなものがあることを保証しているように思われる。しかも、その髪は触れると傷つきやすいことも示唆している。

ほくに帷子を着せようとして、

ほくの腕を飾る

妙なる巻き毛をあやしんだり、傷つけてはならない。

この秘蹟、このしるしに手を触れてはならない。³¹⁾

生きた骨をおおう「膜」や「薄い膜」のようにこの艶のある髪は「苦痛を感じ」る、あるいは感じていたかもしれないことがわかる。この苦痛の感覚は骨に生命と感覚を与えることによって神経組織の代わりをしているのかもしれないとダンが推測し続けている。

これらはダン詩中で最も有名な骨と髪であるが、これらに関係する神秘的な生や部分的な生はもっと広い永続的な関心のほんの一部でしかない。しかし、こういった骨と髪から離れてみることも半ば離れてみることもいいことだし、ダンにしてもこれらをあきるほど書くことはできない。「行って、流れ星をつかまえて来い」の不思議な苦行の中で、髪が外から飛んできたかのように頭に降り立つ。

万日万夜馬を早駆けさせよ、

きみの頭が真っ白になるまで。³²⁾

髪が生え方や髪が白くなるのは我々の意識とは別個のもので、わからないもの、天候のようなものである。「聖列加入」で「五本の白い髪」を数えたり、あるいは「愛の高利」で「ぼくの茶色い髪の毛が白い毛と同じ数になった時」と詩人は異常に髪の色を気にしていたようだ。説教でも「髪が白くなるように君主国も自然に減ぶであろう」³³⁾と言っている。帝国の力も毛髪一本に縮むのである。「十字架」の中では骨が夢中になるほどの詩的関心を持ってながめられており、いつものようにダンが関心を向けるのは生物と無生物とを結びつけることである。

……頭は頭蓋骨を通して熱を発散できるが、
それは頭蓋骨に縫合線があるからだ。³⁴⁾

脳は過剰な熱を頭蓋骨の継ぎ目から発散しなければならないというのはアリストテレス学派の見解であり、この考えが何故ダンに魅力的だったのか理解できる。ここには骨をおおう膜という説のように身体の中の繊細なものと生命のないものとの密接な関連が含まれているからである。

ダンが性行為について書く場合もこれと同じ技法を使って読者を敏感に反応させる。この一番よい例はわいせつで取るに足りないものとして批評家に除かれる傾向にあるエレジー「比喩」³⁵⁾に見られる。例えば、ウィルバー・サンダースはこの詩におけるダンの意図は「ショックを与えてくすくす笑っていることではない」³⁶⁾と言う。この詩では話者と恋人と、もう一組のカップルとが意図的に比較され、後者はひどく嫌うべき人物として描かれている。しかし、ダンの手にかかると単なる侮蔑の言葉を並べるだけでなく、肉体的経験、例えば後者のカップルの女性の汗の描写のような不快な個所がたくさん、巧みに、医学的に盛り込まれる。

君の恋人の額の悪臭放つ汗の泡は実に汚い、
精液に似て、月経によるくずれた腫れ物から出る膿のようだ。

身体から出る排泄物としての分泌物に興味を持って追求し、単なる汗では満足できず、それ以上のものを求めて四つのもの——汗、膿、月経、精液——を熟慮の末混ぜ合わせた。同様に相手の女性の身体に関する描写も結果としては気持ちのよいものではない。

君の女のあそこは、火を吹いた銃口のおぞましい口か、
粘土の鑄型の中に流し込まれたばかりの
灼熱の溶鉱か、溶岩を吹き上げて
まわりの草を焼きつくしてしまうあのエトナ山か。

ダンの目的が達成されているのは女性器と火と溶鉱との類似点にある。熱い銃身で性交するという含意は感じやすいものを感覚のない無生物に結びつけることによって有効となるのである。このことは特に人を驚かせるという点で前にダンの作品で見てきたことである。焼き尽くしてしまう草として描かれた陰毛に関する機知に富んだ詳しい説明によって様々なものを寄せ集めて作られたこのエレジー自体に不快感が付け加えられる。この詩の無生物的女性は「プロブレムⅦ」の誘惑する無生物的な女性とは、この女性が無生物的であることを除いては、あらゆる点で違う。違う目的ではあるが生物を無生物に変換する実験を再び行っているのである。詩全体を通して彼の目的とするところは（若い詩人には共通するものだが）ダンが激しく反応することによって我々がいかに物質界のことを知らないかということを知らせることである。

このエレジーの終わりの方で、話者達の愛の行為をもう一方の恋人達のそれと比べる。まず、もう一方の恋人達（「君の最後の行為はがさつで、荒っぽいものではないか／鋤が石ころだらけの土地を引き裂くように」）、それから話者と恋人は、

慎重に、うやうやしく

司祭が聖なる捧げものを運ぶように、

外科医が傷の様子を丁寧に見るように、

そのように僕達は抱き合い、触れ合い、キスをする。

当時の医学から取られた後半の直喩は探り針——普通銀製の先の丸くなった外科用の器具で傷口や傷口の窪みの方向や深さを調べるために用いるもの——を入れて傷の様子を調べる医師に関するものである。この金属を使った喩えを考えていくことが、説教では罪人の心に突き刺さる神の剣は男性性器の代わりなのであるが、説教をする日々にダンが興味を持ち続けたことであった。この剣は「傷の様子を調べる探り針のようなもの」であろうとダンも聴衆に向かって言う。つまり、ダンも恐怖感を覚えないで傷の様子を調べることに耐えられることを勇気あることの例として用いているのである。³⁷⁾ 詩中ではこの比喩の持つ苦痛の含意に外科医も恋人も今どこまでも優しく注意深く挿入しているのだという意味が重ね合わされている。他の例でも既に見たように生命あるものとないもの並置——この場合はどうしても尻込みしたくなるような感覚のある生きた組織の中に丸い金属を挿入すること——によって生氣ある効果を生み出しているのである。

驚くべき忍耐と創意を持ってこの手法を用いているが、この手法を用いるのはもちろんダンだけではない。「比喩」の外科用探り針とブラウニングの「夜の逢引」のボートのへさきとを比べてもいいかもしれない。

灰色の海、陸地は黒々と続き、

大きく低く黄色い半月は空にかかる。

驚いたさざ波は眠りを破られ

激しい渦巻きとなって飛び散る、

入江にへさきを押し進め
濡れた砂浜に乗り上げる時。

話者の予想がその言葉に言葉以上の意味を与えている。驚いて眼が覚めて乱れた巻き毛の恋人を見るであろうという予想がボートの周りの波に表されている。そして濡れた砂浜に突っ込むへさきはかくも率直にきつ立した性器とそれを受け入れる濡れた性器とが結びつけられているのでこれがヴィクトリア朝の詩かと半ば驚く。二つとも（へさきと砂浜）無生物なので人間そのものとは関係なく物質的側面に集中するようになっているのだから、水しぶきをあげて乗り上げるへさきを性交と解釈するには非常に感覚的で限界がある。しかし、ダンは探り針と傷とを使って感覚的な含意のみならず繊細さも提起しているのである。医学的な内容（外科手術を必要とする患者、外科医による治療効果）から生まれる考え方を恋人達に当てはめると同時に、人体の持つ敏感な感覚を効果的にしかもしっかり定着させている。

「リンカーン・インで作られた祝婚歌」にはこれとは違うもっと荒々しい性交の描写がある。「比喩」に出ている司祭と捧げものの趣向がこの詩で仕上げられている。

……待ち望んだ花婿が近づいて来ると、選ばれた子羊のように、
静かに横になっている。うやうやしく司祭がひざをついて
やって来て、その腹が開かれるのを待つ子羊のように。³⁸⁾

‘embowel’（「腹を開く」）は‘disembowel’と同じ意味だと辞書は言う。が、彼が選んだ言葉には何か腹に入っていくような語感があり、従って、差し迫った挿入という内容により自然に合うことになるので、もしダンが‘disembowel’と書いていたとしたらこの行はひどくお粗末なものとなっていたろう。しかし、そう書いたとしてもこの語に含まれる実際の意味がなくなるものではない。司祭が近づいて来る時のうやうやしき、ナイフは見えないにもかかわらず我々は子羊の内臓が結局は床の上に積まれ、丁寧に行われるとはいえこの荒々しい行為に喩えられるような何か花嫁に行われるのであろうことを必然的に意識する。ひざをついて子羊の方に来るといふ司祭の詳しい説明には、これを寝室に当てはめてみると非常に現実味がある。花婿がおずおずとベッドに近寄る姿を想像するのである。これらの行全体に愛と苦痛を結びつける探り針と傷の直喩に共通するものがあり、もちろん何か硬い器具のようなものを挿入することによって身体が傷つきやすいことを強調するのも似ている。

ラブ・シーンにおける主要な場面に無生物を使う工夫は「サマセット伯爵の結婚式に書いた祝婚歌」で最高潮に達する。次は花婿がベッドにいる花嫁のところに来る場面である。

流れ星が落ちるのを見て、その後を追っかけて行く人は
そこにジェリーのようなものを見つける。
流れ星が落ちたと聞いて、急いで走って行くと、

そこで発見するのはジェリーのような女。³⁹⁾

最初の二行で言っているのはナスタックと呼ばれる一種の藻 ('gellie') で、雨の後乾いた土にできるジェリー状に見えるものであり、17世紀には流れ星ないしは流れ星の残存物と思われていたものである。花嫁をジェリーに喩えるのはもちろん不安に震える花嫁の姿を伝えるためだがそれだけではない。流れ星を追って発見するのがジェリーでは——花嫁はもちろんのことだが——困惑は避けられない。ここには当惑と落胆の様子が垣間見られるであろう。このダンの直喩は花婿の複雑な心境を写し出している。予期していたものとは違うという感じ、つまり初めて見た裸の花嫁が自分が知っていたと思っていた女性とは違うという感じを抱いてショックを受けるのである。これは（ダンが次に説明しているように）新しい服あるいは見慣れない服を着た友人に会った時に感じるような疎遠感を覚えさせる効果を生み出すのである。この説明自体は巧みに消滅させられて行くのであるが、裸の女性を見るのは変わった服を着ている人を見るようなものなので、裸であることが変わった服を着ているのと同様に近寄りがたく、分離感を覚えさせるのである。更に、花嫁をジェリーのような無生物のものに変えることによって、一瞬考えていた以上に裸の花嫁の肉体が圧倒的な質量感を持って迫ってくるという印象を花婿が覚える様子が伝えられる。

人体の深い内部を知ろうという意識作用が穴——例えば耳——に対する特別な興味をダンに抱かせるのである。耳の内部の半円形の管やらせん管にたいして複雑な空間を暗示するものとしての「迷宮」という言葉をダンが初めて使ったように思われる。17世紀後半以来迷宮は専門用語として受け入れられており、OEDには1619年に解剖学で最初に使われた例が載せられている。しかし、ダンは詩で三回用いている。「第二周年記念の歌」(197行目)と「連じゅ」(218行目)で迷宮が使われ、この三つの内最も早くて良い例が「風刺Ⅱ」にある。

言葉、言葉、優しい女性達の柔らかい耳の
迷宮を引き裂くような言葉。⁴⁰⁾

鼓膜を引き裂くのに言葉ほど鋭いものはないということは耳の構造が繊細だということを確認させてくれるし、肉体の内部で何かが引き裂かれるという示唆は探り針と傷の直喩と同様に我々に鋭い痛みを感じさせる。

ダンは身体内部の空間を認めさせようと神経と糸を結合させることも考えている。「埋葬」の髪の毛は引き抜かれて身体中に網状に張り巡らされている。

僕の頭脳が身体の隅々にまで下降させる
神経の糸が、
身体の各部分を結び、一つの僕を造っているのなら、
力と業を得た髪はもっと優れた頭脳から
上に伸びて

更によくそれができるはずだ。⁴¹⁾

「糸」と「結ぶ」は共に神経が糸のように実体を持ち手で扱えることを示し、身体の内部で結ぶという考えから我々の意識は身体の表面の下の奥へと広がって行く。「下降させる」という言葉からあたかも神経の糸が身体の内部でぶら下がり、自由に降りて行くような感じがあるので身体の内部に空間があるのだという感覚が加えられる。(自ら「力と業」を持つ注目すべき能力のある髪は付随的にダンの髪に対する執着心を表す更なる例となる。)

神経の糸に関する解剖学的関心は「第二周年記念の歌」にも再び表れている。ここでダンはエリザベス・ドルアリーが死んで、その魂が「ビーズを一本の糸で結ぶように」早いスピードで星を通り抜けるところを描いている。この想像から更に詩中に脊髄の軟骨を持ち込むことを考え出し、エリザベスは星を結びつけるとダンは言うのである。

我々の身体がゆるまないように、首や背中の小さな骨が、
脊髄によってしっかりと結ばれているように。⁴²⁾

彼女の旅は脊髄に呼応するのだと感じさせられる。「脊髄」には柔らかくてどろどろしたという語感があるが、脊髄が脊椎骨を「しっかりと結ぶ」のだから、ここにはダン風の強さと柔らかさの融合がみられる。初期の頃からダンの頭の中は「ゆるめる」「神経の糸」「髪」のような特に硬さや柔らかさを感じさせる語で一杯であった。身体の持つ力について思いを馳せているのである。だから、「風」で「髪を切り取られ、筋肉がその力を失ったサムソン」⁴³⁾のような行が生まれるのである。

ダンの人体解剖の最も具体的な例が「別れ：窓に刻んだ僕の名前に寄せて」⁴⁴⁾にある。ここではダイヤでガラスに彼の名前を刻んだ時にできる一連のぎざぎざな文字がぼろぼろの骸骨と見られるのである。

……この骨のようなぎざぎざの名前を
僕の骸骨と欲して欲しい。

ダンは骸骨の「硬さ」と岩石のような耐久性を伝えたいのである。しなやかな「筋肉、神経、血管」をはぎ取られた「僕の肉体の垂木、つまり骨」と表された骸骨は建造物のように硬く、生命を失っている。骨を垂木と考えるのはダンが身体を建造物と感じていることと関係がある。これは説教集でも見かけることである。ある説教では実際に詩と同様骨を「梁、横木、垂木」⁴⁵⁾と言っている。この詩では絶えず不安が意識されているのだが、名前を刻んだガラスが建築学上永遠に存在すると主張するのは非現実的であり、この主張も名前やガラスも将来女性が新しい恋人に窓をあける時のことを想像すればもろいものだということが思い起こされる。

君の軽率な手が、

僕の名がふるえているのに、窓をあけ
 才知や土地で君の心を攻める
 新しい男をながめるなら。

骨はまだ生きているのである。裏切りを耳にしてガラスで震えるこの小さな骸骨は詳しく見れば恋人の不安の表れなのである。つまり、心の動揺をエックス線写真に撮ったものなのである。同時に固定し、動揺するので、この小さな骸骨はダンがいつも感じているように身体の二つの性質——硬いけれどもろい——を伝えるものである。

5. 身 体

- 1) ルーパト・ブルック著 『ジョン・ダン』 *Poetry and Drama I* 1913年 185-188 ページ
- 2) J.E.V. クロフツ著 「ジョン・ダン再考」 ヘレン・ガードナ編 『ジョン・ダン：批評論文集』 エングルウッド クリフス ニュージャージー 1962年 84ページ
- 3) 『エレジー』 57ページ
- 4) トラハーン著 『黙想録百題草 詩 感謝の祈り』 H.M. マーガリュース編 オックスフォード 1958年 第2巻 4ページ
- 5) ジョンソン 第8巻 41ページ
- 6) トラハーン 前掲書 第1巻 111ページ
- 7) 『説教集』 第2巻 228ページ, 第10巻 232-233ページ, 第2巻 83ページ, 第3巻 169-170・223ページ, 第2巻 78ページ, 第9巻 61ページ, 第2巻 197ページ
- 8) 『説教集』 第7巻 359ページ, 第6巻 142・234ページ, 第7巻 106ページ 第3巻 233ページ
- 9) 『説教集』 第5巻 120ページ
- 10) 『説教集』 第4巻 227ページ
- 11) 『説教集』 第8巻 174ページ
- 12) 『説教集』 第3巻 92ページ
- 13) 『説教集』 第3巻 113ページ
- 14) 『説教集』 第3巻 92と105ページ
- 15) 『説教集』 第2巻 84ページ, 第10巻 80ページ, 第9巻 223・124ページ
- 16) 『説教集』 第1巻 192ページ
- 17) ウインフライド・シュレイナー著 『ジョン・ダンの説教におけるイメジャリー』 R.I. プロヴィダンス 1970年 68-85 ページ
- 18) D.C. アレン著 『ルネッサンス医学に関するジョン・ダンの知識』 *JEGP* 42 1943年 322-342ページ参照
- 19) グリアソン 第1巻 377ページ
- 20) ベアド・D・ホワイトロック著 『ジョン・ダンの遺伝子と子供時代』 *N&Q* 6 1959年 257-262ページ
- 21) 『説教集』 第3巻 236ページ
- 22) 『危篤時における信心』 23ページ (瞑想詩IV)
- 23) 『エレジー』 57ページ
- 24) A.S. ブランデンバーグ著 『形而上詩における動的イメージ』 *PMLA* 57 1942年 1039-1045ページ
- 25) 『エレジー』 43ページ
- 26) 『エレジー』 9ページ
- 27) 『パラドックス』 47ページ
- 28) D.H. ロレンス著 『虹』 ペンギン版 1970年 49ページ
- 29) 『祝婚歌』 49・167ページ
- 30) 『説教集』 第5巻 353ページ
- 31) 『エレジー』 90ページ

- 32) 『エレジー』 29ページ
- 33) 『説教集』 第7巻 271ページ
- 34) 『聖なる詩』 26と94ページ
- 35) 『エレジー』 5-6ページ
- 36) ウイルバー・サンダース著 『ジョン・ダンの詩』 ケンブリッジ 1971年 40ページ
- 37) 『説教集』 第7巻 189ページ, 第9巻 408ページ
- 38) 『祝婚歌』 6ページ
- 39) 『祝婚歌』 18ページ
- 40) 『風刺詩』 8ページ
- 41) 『エレジー』 91ページ
- 42) 『祝婚歌』 47ページ
- 43) 『風刺詩』 58ページ
- 44) 『エレジー』 64-66ページ
- 45) 『説教集』 第5巻 352ページ

(2004年12月2日受理)